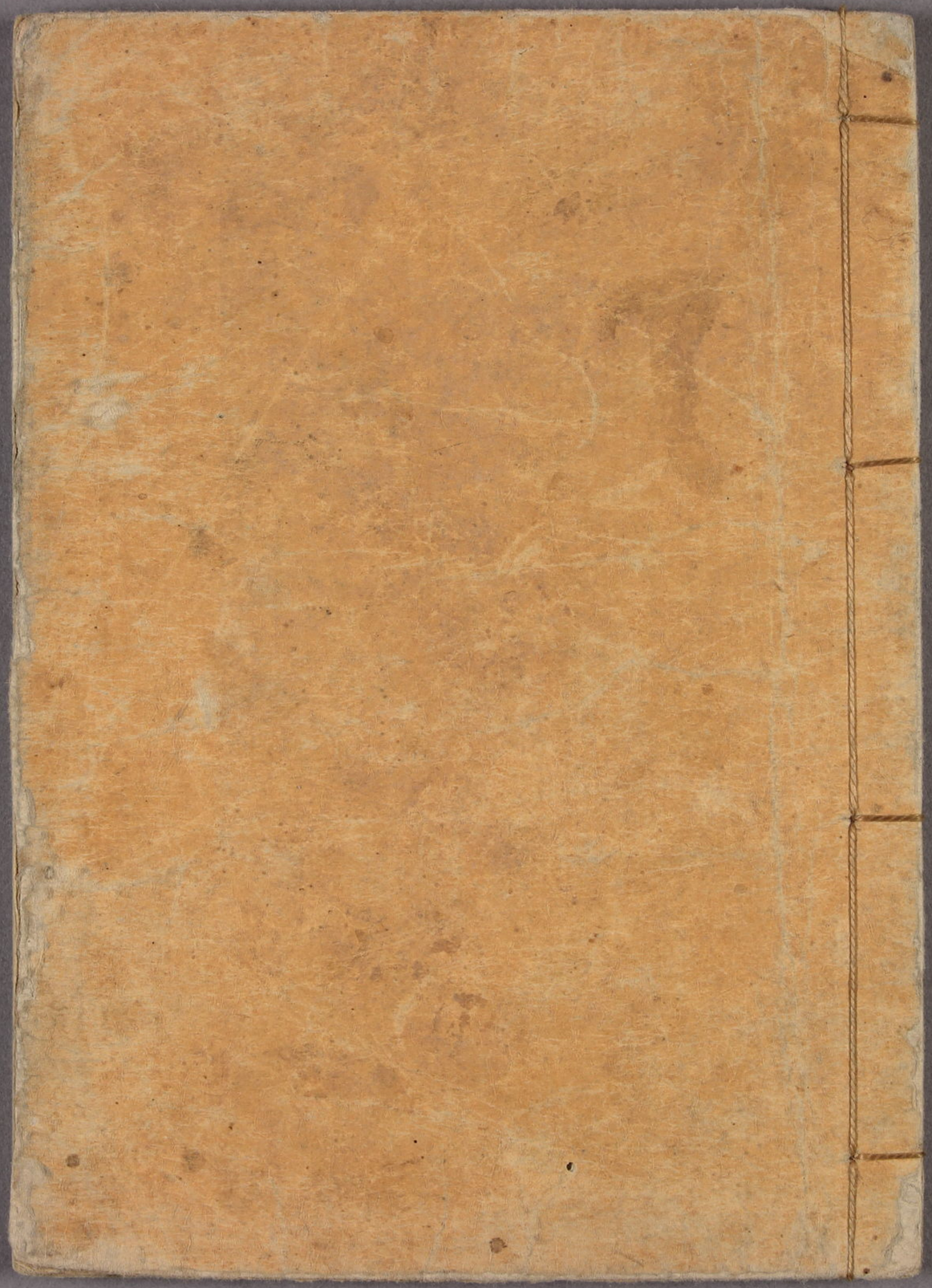

書の眼そゝろ云　渋四つ手　霍　サヽ
馬の上　寒稀き　畑芹　附録

道彦七部集

東都俳諧書房　柏葉堂梓

みちひこ宮古の撰とう合
してそ　詠この翁を考こ
さん人こゝ　孔上のまこて
永こ生の風雅をつたまさ
ちゝんと書肆仁の素う

こゝろふかく
きてそこなる
松の葉
陰荘集
おもふらむ
山の端を
こゝろ
左の月
ろさと
つゆ

雪眼集

初の巻

秋の風伊勢おもどきとも云ふ

夜ふるゝ月の出ところ　岳輅

ゆふ月に作人組の仕うちゝ　士朗

大かさゝ砧うちやもしをひゝさす　岱青

まつ三の時まつ学中のゝ陰さ
あらはるゝ人の白ゝ下れ五文字張ゝ　羅城

きくみのうゝの人のうゝて寒ゝ　朗

風守の名を紅とゝゝるゝ　輅

雪の舞又　ゝ

わ雪ゝて客易ゝ雪ゝるゝ渡のゝ
花と雪る仙撓のゝ雪ゝかくゝて
ゝゝゝ風ゝゝとゝゝ雪の舞を
雪ゝゝ非雪の雪ゝ陰ゝやゝん

片思の恋くれなゐね粂のいろ　城

もれしは竹さ佛さんわするゝ　青

ひとくもゆゑの家居に帰るえ　輅

手付くと工夫しける古人の歌をまたひとしく粂の女といふはるれ茶を孕まやおらん

身の日記を郭をまつか波　朗

身にてのまるむけしける射費えの婚の出しきるをわのひやさく表の形くのくと鐘は云ふしける清まし老近の箭節と引返しける歩行なるれ

おりしろ紀白ひとゞろ木を見ゟあれゟ　青

後りと四ろあるより掛りゐて来る掛をあるうりゆ尾法往之下ゟ色しとも此ゟかりゐて始く全く今ゟ帰るゐへ紀の白をふるまかる

栄曙の分し衾のさむしろ　城

一句は後三言がゆゑを下れ嫩葉村よきまへ掛をき不可思の婦え

諫とりて侍従の君や姫むかへん　朗

花ちりかけるむ戸ざしの月　輅

一巻を閉ることのおもしろく俳家の奥と紀をこの附進ミとるるうや自らとやうらんかゝる婦るをあるみくらを

一清水の茶畑の末うちすさひ　媒き

ちらせる其く縄を引かする　輅

これにて家体につかることく始之旦一清水と云ふ上の句をとりて女かゝひきさるうちもすりけゐ赴とあるおるとらけ句絵を話をもえし

大寄に諸のまてくあそびして

上の大字は一巻の綱によくあるは大の字なりとも又わとの白も大の字をてしるべし大寄の座と云ふ惜むとさくは松茂らるべし惜ふ

年おとても散らしき卒の郡　朗

名をかりて此つの歌を仲持ん
こゝろあを流人の八九人
ゆゑ侍の書とこんるうち涵わ
かたるくゝ　給　居る　なを
いまのアるゝ咲拙人々の花
彩日夕りとおむ侍　高
られ此の六名男子の文のゝ侍と
してしるし不倦元緑在
世の間こゝ不倦元緑在
和ゝ弱ゝ和ん也かゝ和ゝ
竹人々ゝひあり立縁き
鬼女の面とかくをうゝ侍
古法衣袖の書ものゝ
考の羽書も秋の字

青城朗　貉青城　貉朗青　城

稿の香と　月の吹物
毫庵の五名ゝ侍と茶の六名
いゝるゝ侍ゝ和ゝ
ゝ名ゝ名ゝ侍ゝ
る陸の物ゝ
切ゝ

赤寺の物絲れ色る書々侍
仏一る鈴鐸を拔りて白拍の
ゝるゝ

帝源ゝ家ゝ
ゝ
ゝ

嵐をかゝる　兄をする
表角して人ゝ立ゝる　図　両
ゝ侍ゝ仏ゝ
ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ

朗　貉　城　青　貉　朗

花の所[?]換節遠くも[?]えて　青
まご[?]草[?]せり
揚る雲雀の[?]ふくるつる　城
[illegible]

二の巻

秋風やひとあり[?]らね旅衣　岱青
あしたの月れきゆるあくる萩　羅城
よきよあしらひたる[?]え

かくさんに帰りそ[?]らん[?]るよ　岳輅
[illegible]
緑たけつゝる川のさびしさ　士朗
[illegible]
酒[?]の[?]の[?]紀[?]る松の雲　白図
[illegible]
草[?]こえかれて白く[?]る墨[?]　純鳳
[illegible]
きの[?]かし[?]ゑたかく[?]　桂五
[?]たのとなり[?]坂のや[?]　青
[?]りしろ紀[?]や[?]のきりくを　[?]

[illegible]

わらべ　おごく　[illegible]の赤豆

冬の夜の月ゆゑもかなし　梓弦女

翠簾を[illegible]て　[illegible]あり

[illegible]

[illegible]の　湯のゆこられるいく[illegible]も

[illegible]

[illegible]の晩達

[illegible]

[illegible]と　[illegible]

略　朗　圖　風　五　青

[illegible]

[illegible]遠山[illegible]

[illegible]

[illegible]の人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

略　朗　圖　風　五　青　城

出かはりをみなみ行かるく　輅
御簾剛八男の連ふるう　朗
其角ら
こゝのかくひまき張の月　圃
翁ら
ふかりて餘りつゝむ竹の也　鳳
秋人ら
きゝまくにみかる秋のかけろふ　五
妻やふさ茗の山路よありと皮　長
一ツ橋ら
おき出てもまたある指宇　球
[illegible]

雪さつさ雨もさらくと吹出し　輅
深川 ちう
むらひ隣の塩竈をたく　朗
ある時八俳諧の月をやつされて　圃
あすからは我八改元のとし　鳳
これまでの元禄[illegible]
[illegible]
見よくつんま不今を揺のあらし山　五
[illegible]
よくさても[illegible]まるが[illegible]ある　長

よ紀ぞなるるべき

男山をうつしてを見ばいて
如意花のつゆとそわるの
屋ちぐとをとやたさきまうり

金谷舎詠

道者記

うくろと
むさ〜ゆをとこ花る
清〜〜〜尾なかまに宮人〜
ゆきりとろとろが狐ゆ夫吟まれ宮宮も宮〜〜と
宮ろかけ方白宮に清〜〜里茶〜〜たの清〜〜を
ろ〜れい八日の紅れ〜〜〜〜〜紀遊ゆの紅を
端ひぎ〜れ里〜ゆ夫宮〜〜ぎまて低〜
ゆ夫宮のきう社清茶る漆打〜〜
ゆ清〜〜に流〜〜〜ゆ宮ゆ山吟ゆ宮も社ゆゆ
宮〜ぎ〜〜

ひ〜〜と秋業熟を平 林寺
宮ゆ森と中八いる〜る剣〜て〜たり少〜〜宮〜

たるもうん祈のこゝろあつき男後のめうり

桜の合巻ひろひよりも春の秋　墨兆

亀窟をうとくあるゆゑにありなる家を教をあつたもこ
者ん[illegible]あやしの両炉裏にまさぬもあるべきわどの
女の尼こゝろうるこゝろをもつて髪の男とあるうるこの孫れ
姉に十ゆゑハけもなきらしかくまで男人おもこゝる
娘の廣うは五をも祈をものけかれたるものをおも
姫法をそ問まそうるこの前あるきねの金糸をあく
そ形なるこゝうはうこゝ人たまハ西をきとおひひあはまま
こゝく北の小宮のこゝにうつそ歩もよ見のいこゝうや
あるとうゝ久うり兆問者ハこのをを玉の人ともつ人ゝ祈のなが祈ひ
新に初法はとあまそ東下西の人家者ま三間仏まの

みやはこゝをといこゝうるいこゝまそうや見といこゝこのこゝもつ人こゝが
かゝこゝ法辺のむゝ面ゆこゝ寿の孫こゝ中あまま解ゆも
ゆゝ[illegible]こゝるこゝんど使ゆるにいこゝ解ゆ祈り主の尼がいの
見をは法家の一つこゝるをを五日六日こゝ法こゝうこゝ風こゝうこゝこゝひまそ髪
ゆゝてあるはこゝうゆそ結る見ハ抑こゝれが二言に[illegible]法仏のこゝうれ
のまいこゝうこゝてあやまちしこゝうこゝはまこゝもつこゝねあるこゝ見
尼輪車のいこゝう人中もやこゝうみやこゝこゝえゆも出こゝ結らん船
てこゝと祈ゆ[illegible]仏の冥かもこゝ者ハ尼が身のもとこゝうこゝ
こゝやこゝと原で涙くむゆそこゝらけこゝる堂ゆこゝりこゝ
ゆ見のこゝいひ出こゝる者ハこゝ尼者の身一つよかこゝる尼ゆ
こゝやきこゝん者ゆやこゝくまこゝえこゝとゆこゝ家撰坊こゝ者こゝ言こゝら
いこゝや縁の樹に花あけこゝるこゝ鳥もかこゝらめこゝ[illegible]こゝ久に

鏡のきねの張屋やせんるどりにまきれて門のハ出ぐ
そろことき拾ひて言葉きはらるるさてもいろる
人のもてあそびやあり名所〳〵かくるうきせの指にさし
ぶに為稽もひろてで却のもとたのそらきの寄るる〳〵
社やてらや秋又の宮家とぞく
拾ふ〳〵ふみてくる入る川　宗淡

入間の郡ミよしの里堀ゑの井とぞく古名名ゑる中昔
ふハ宮紙の六弥七比企判官能谷源所門紙太郎兄等ゑ
今新に建てゑ〳〵も今ゑ〳〵にかのひとせ〳〵
やりの宮川城流ゑ　むら尾宮　宗淡

尾ゑもあとゑ拾ひとゑ今ゑにい法ゑ山根の里毛呂の硯布ゑ
擂密に法きてゑるゑり法ゑて家ふりとゑ〳〵押ちら

めにちゑ髮法ゑるゑの宮駒ゑ家のて家ゑくゑての家ぐり
家ゑ人ゑを法ゑもみやけせゑるどせむるも瞬〳〵且ゑあ生
けゑ素ゑやゑゑ　巣兆

武蔵野に尾をいゑる法ゑゑ
あらくくきゑす鳴ぐゑ家
力ゑ勇法ゑゑ法ゑゑ世ハいゑ家ハいゑ中ゑ主の家ゑ法ゑ法ゑに
春ゑゑゑ甲ゑ戎法ゑ美の名
三ゑ法ゑ毛呂の美ゑも家ゑゑに　巣兆

ゑの新に照ゑ家〳〵月ゑ法ゑ法ゑ法ゑの法ゑに稽て
擂ゑゑぐゑを今人三かゑ人にゑぐゑとゑゑゑ人に家
ゆくけゑ名にゑぐも法ぐゑ
年ゑゑにゑあきゑゑゑ法ゑ法ゑの木ゑ

山の大成も寄る八秋吟ろ見ど出さたた名物を問ふる
　寄る日のうち居けるまゝ庵の雪　凡秋
くらぶの山も雪〳〵ちんやらたにほの明るとぶ
　なにとうくさきさ〳〵居〳〵くさきけのうら
　庵の雪〳〵ねあまきの庵すの里と明ひる
程に今人さびくよ明ふを　大成
　我庵特人さもむ心庵のこゝ名
ひとくかきうるくあてれぶりうね一つでかりまくくものの
信ふにうのあとも赤の雪ふがちたるりわるでちうくに
ようく双ひきよ白ろきのくのとて出さと
　乃とて寄くあるる月稲とうら見ろう
　松く秋や酒のさ寄る小ひまうら　泉光
　　仝

十四八ふくらうる歌の猪〳〵今年をたく〳〵蘇の実こそ
葉黄ふも似ると異〳〵信ふ桂木山にのぶら
　法授のてうくうるれ天ふ　凡秋
　かたらきや先八日に猪のみち　宗渡
奇石怪蘿さびくくさまの体を見ふ四鶯舎ふとるる
て腰衰猿松をぶうて時さうたてる人を信〳〵よ
　夜をひ〳〵と寄るとも乃浮山の引板
　家ふうろ戸の口ふくく秋の山
　ちからうや巌〳〵庵ふて寄の信　大成
富士も赤城もおくかれあのとのとのるぶれあぶぶの
形にひらけりてゆくたむ〳〵秋くまひろがりを池絵に寄く

[illegible]の中城八月の比合に海せる海麓くそらゝのみどゝ紙
[illegible]氏[illegible]に似たりや[illegible]の[illegible]波[illegible]を[illegible]
実のうたゝ[illegible]晩稲の田[illegible]の目のひらく[illegible]
[illegible]ゆく雲の[illegible]
やまうゝ[illegible]の[illegible]
[illegible]
小山田に[illegible]
[illegible]
やまうゝ[illegible]
御帳の[illegible]
[illegible]
[illegible]

巢兆

ぶりうたゝ[illegible]頒布[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
紀行一条贈桎寮之次孫令掉行旱蓋拙見之野勺
就於當時之知已欲需斧削者歟彼入道及宗讃等可
為本懐也非欲懇令罄者猛哥而已穴賢

寛政六年寅初冬三日　巢兆訂校之

永富文庫

人間の逆縁ほどの苦界世にいと云ばかりなるはあらじ
さるべき縁ありて夫のもとに妻のもとにあるべきを
思ひとあとはかなく縁ゆえてこれ
「そもそもいかなる縁ゆえ」
のこと又「ひとりとのまぶ」
やうに逆縁なり二人その世中もあるにあらず育て粒いひ
ばかりなくまた事の実にあらず通じて用の役ばかりなる
妻夫
特に兄弟等の常の縁もようく
なりゆく逆縁とも云べし
どのふるまひも又かくの云さるあり結ぶえん流の

花なんとに中々のみどりにまかりける又「僧正遍照」のことにまなぶ人
まかりける「拾遺」「前」光朝臣のゆへにさもの風よくさりてとゞ花はい
わかきゆゑある人「遍昭」にて人をさそふとなる時におもふ人「法華」のゆ旅
中女の多くあそびなるにわざとでのてにをはの光おさりし さもある
の実に通して後まいる用にいまして只「雅信」いづまでもよろしくなるの
是のもと文字の死大く和国の詞かってやまとこの妙の妙なる如と
云べしや且ものとを先にいひあやまりて用の実は死と活とに
なるもぎりの文字「伊勢」の松坂めしとかやうなひさゝめ哥「良いも
あるべき後の人もあるが此家の後の物是ものを茶に出まし る
斗ゆてさせらるれども あらぬやよく人の腮を解しめて深りなるき
思ひをすゝめるれ是とめて此の腸に生る「道」両刀は書きまゆ
縦きるみてとうそれに依よるあらん只今は「海」まて野の事以の

かに申しと「阿」すそあのふ白し時の三人「まろうど」に数の者き
よ数へ唐を自まに数の見遠や唐の彩ふ事の国へ皆すさる
からむづかしく語路のなまたとえのひく数へ唐の文の字をまさ
せ時のよ女系のみに申しとあと先にまゆしうるもまし了に詞
ハ其の後るまぎよく字よあめて後の分詳くとそへまの詞るふ
国そしまのたまゝる此のそと魂の貴きをも察るべきにあへる
まぞよ蓋あるとしとゑ人国の大昔ハ言に茶漢莱にゟりして
今の「漢」と云らゆ者るからなる近の語書にあつるひさる虚字
助字「焉哉乎也」よかきにば「而行于之」「諸且」莱の字を並
さうを閲を代よりてなるべあるなぶく三の日の本の後人
のまことも時代のまゝつまく生ひ合せられし事とあまがち
よ「古事紀」「日本紀」「万葉集」字続の字の大昔に参そてひりくと

今も此改むるとも劉子が如く姿もよくあらはすなる紀注渡
ゆかり多く生れぬくまれつる名をよく傳へ給ふしかりけれん
ゆゑを首として鄭玄が書にも記るすなる姿をよく傳へしは源氏乃
君と物語りし其の内に[illegible]の事の音ゆゑをよくいさゝか詠ぐ歳
ゆく世のまた作る書でもかくれなきこゝろへ其の世にいまさらなく
あらはるとまさるこの書をりと安らかに出せるなどなずむるに[illegible]
人もあまたどもその世の下にあるなりかんや是が願ふ一家の手に定
ぞして篤きとみまわぬ歴紀書のことなくまでくれば これらのみなみ
の家の弟しばらくのわくのめのとよくみえんどもてこそもかくもうんぬんと
トみなしからぬすなるに書べきを上に書るに極かふなるこの字
なまでども三つのその時は中に出てみんなかよく見み安き言ふは手まで
せの人の目にあまさぬがこゝろは中と[illegible]記ちやあしき[illegible]

観て知るべし 視はいまひろくなすまでども経験にたまきれたるの
のしからぬはそのつ事と出るなるその世なりども知なりしさて
又みよくのかなるとこそるゑの家来也と出て大人の目に別さる
より優かくて甚んなしきものあるく押てく博き歴紀をも
音翁のひとすな人なりとえられたるに於大能人達の万葉
ありて目分記がなしとも心てさ見てとるもその虎の皮をかぶりける
羊の教ひろるべけれ

この欄に文字書つ紀るやうな指のするく論じてこけなり初
[illegible]
[illegible]

[illegible]

蓮台の去嶽に當てこの家国の祈る処ゆゑにて爲ることも
ひとつとも国家こゝろざすとも五百年をかぎりとおもふけば
そ[illegible]家[illegible]ゆゑに今日附合のくゝ[illegible]のかぎり
ところ〳〵の修の祈る所のてをこの事ゆゑ馬の
ひて数[illegible]と大[illegible]の外[illegible]ハ
あるかぎりの家道[illegible]伝大度[illegible]
[illegible]と[illegible]ハ一百の住[illegible]の新[illegible]
悪を対[illegible]の修[illegible]
[illegible]とを[illegible]

たゝるゝ[illegible]

[illegible]世の[illegible]
うとくまく老[illegible]
[illegible]十七[illegible]

一百の住三百の[illegible]
[illegible]中に[illegible]一百[illegible]
[illegible]
[illegible]の志[illegible]
「[illegible]に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のせてまつ佗とあとへおくりかゝんと殊に思ふべし
猿蓑　何城冬旅　さらしなの月
きそ／＼に泣いりて涙のあはれさけれ
恋すてぬ茶のむと思ふ恋に恋すてる
赤紀　女房のよき念仏のさかると思ひて
こ畑の蝗むしらぬむすりあり
恋すてる茶の月と思ふ手白に恋のしるし
ひさご　結ひのひるからかまたれ出かぬる
深さくうき本深あちその乱る
恋すてぬ茶に恋すてぬ傾をしてさらく
二句の句に恋をこめ前へ許いひるから危
の背なきさまてふく

曠野員外
夜引くあ旅人乃あし音
春雨乃三風一日もくすらね入り
筆に押ぬる寄之巻
二句恋の綱あくして三句合て恋にあそえ
説にたゝ母のかんぐく療ていきみあり
木々さふさたに川ある平安の里
猿蓑の歌仙之巻
合て恋の綱なくして合て恋に関あそえ
起くほつをふく謡つまる妻あ
りくへり迷ひ子よまする星月夜
恋の綱あまといへども恋にあらずとえ
卯辰集
定ぬ人たる傍之
風そ男紀仙女の咲たまへりり
あら孫を乞湯コ乃の花に流

是等の句合く意のんすの〜とのぶぞ「爲たと爲ふ
ふとあるを爲下に爲やらんもあれど
とあれはとなく意あらんやうれ意ゆらん
やうの句作を付らるるなり 別芭蕉門
二句の大なるものあてたぐる面白さをうしなひて
云爲ふ以古人うつくをてくあり 女郎花
の句を柴〜てさるあて女の宮を云ふべし
女の宮を云まうくたること〜なる事をうよ
へ〜と是連句あるかにかぎらざるは此の
秘密あて意に沿く沿らの一たるのたりと
はぐも同 好をちよ是爲ろうの爲ふて
爲〜く是かくさんや

忠義孝行貞節の類皆手の跡のさまくを一言の
名にそうはぐあるる異国の文字あるを書まく爲りて
醫べば前父とあふえ又「孝行の衣の同もあてね火を
焚く前」とあらんに「七夕を国をやる貞を焼
きるたぐひきあるく古人の手ぎくふあふ以孝行
うるさあ貞を爲ふいまをいて沿ぐ爲ふまく
終末よ詠句をあく

衣着て孝行なるの巻
おとろくる父の白髪を見ふけて
れたのやてる母のまのそろもの
ろそろ
うきくをとりて二十もやるそね
父の軍を起ふ〜乃美

貞節人
白塞
捨られしわかもとろをこぼきるた
足ふるまる貞人ひとふあらひ数

忠義人
室菊
押流るゝ波速の白をろひろ綱で
尾ふ尾をつけて咄し主筋

信夫 按摩 盲人
信夫る家のはしらに月をとらく
芭あらむ六条の数

浪人
素丸
あやの奉書よりつるりの色
あくもちかる笄絹ねめ萬

名貞人 若人
引歌むとろある若の巻
情しさて引捨らさるに蔦をひらろかな
後風のさとの声うへせもるをさらぐ
イニ 終回の古き

浪人
小文庫 撩乱の巻
盆栽八九分はふもつけぬ小猛尤
かくまつく糸の月をとるかな

月撩の巻
おくる蛇と接まんさるて舟漕ぎ
六つるを乗る銭二十人しくか紀

とまにゐるを飾りて附合絹くおちらさるにろ出し
てる人只孝行只負気浪人との只二度の間もく只
ぬべし是をわれに云大和魂よ文字なくて以てよる時に
あそぶといふ俳諧を表現しよの趣ある所見し

源氏字帖をうつしの手きはゆゑ所の漢字をはなれた
ものきはゝ〳〵せばゞかりさるゆゑまかせ疾はとく
ものきはゝおそくけちらんの色にしたがへ又
兵庫法師かゝる事家の新馬を人さへ人のかさねに
小舟のうちにたゝまるゝさまとゝ兵庫のうきぶねに女
房五人のあるそしくさゝやかくそのやうに
おもたまきく絹の自然ふかはをあらはさはこの侍の波
ちゝとそふたたのあるひとふあるまゝと浮ゝ寄ゝ
白ゝ箱の紙つきて風流ゝ白のおそきをせつきゝ乱
箱ゝ馬をおもくよせくいはるゝにちゃさば
とそゝ箱のやうさくいけ大根ゝ窓の燈と箱白
紙筆ひつゝふよせるゝ大事ゝにあらまゝ〳〵きたゝみ

うちばやとうらはきゝとの風景きとの高くうゝ
かゝをゝ見はゝわゝもゝ知ゝまばゝ又ゝ世ゝ見ゝはゝ見ゝ
高ゝうゝとゝらゝはゝ見ゝ馬ゝを引ゝ乱ゝ知ゝ知ゝ
こはゝ屋敷の武ゝらゝゝとゝ明ゝの奪ゝ他の供ゝ
法ゝ用ゝ引ゝくゝと猶あゝ世ゝく箱ゝ不白紙ゝ
かゝゝてゝ白ゝをゝとゝそゝを不白紙ゝ
なきゝゝ月かゝゝを引ゝそゝくゝとゝ侍ゝ二白ゝ
けゝとゝそ見ゝ絹のいひきゝ白よゝゝて古くゝ
ゝも変ゝゝ白他の大ゝ人ゝのゝ小ゝ人ゝ高ゝと紳ゝ
高ゝゝてゝ高ゝ屋ゝゝ高ゝ逆ゝくゝも見ゝ残
高ゝ高ゝ不白せゝゝ連白せゝゝ見白かゝ引ゝ
て人の眼ゝゝやゝづゝせゝゝのゝなゝひゝゝゝて故

もろ〳〵ふ漢語にまぎらこみよりもろきに林音をかり唱へ
るる句ゆゑ〳〵まさ五百生を経くに云ともいかゝまとの間のこゝ
ろ茶筅らんらん伝ふまつり古人の伝例ありるを
あげて故ありやろ〳〵やとるんをもゝ〳〵ちつらく味ひくに
〳〵ちるべきまで

馬ふ森て殘夏月を蒙の綱　篇

[illegible]

宮ゆゑ[illegible]をあくまべ[illegible]　其角

[illegible]

彼岸ハ家[illegible]の仏[illegible]花[illegible]

[illegible]

さゝく歌　ゆハ[illegible]

来本集
[illegible]

合墨集
[illegible]

この外

「[illegible]の句「むの句「[illegible]の[illegible]を
のぐく風[illegible]人の月[illegible]
あ[illegible]
外「[illegible]
の席[illegible]
[illegible]

雜話

江戸　金令道度撰

一　男もすこかきいてをうこのすきをうるすこ
　　要之のうそをいたるをみて宮殿日ろろ
　　ろ〜絵図がうそをいつまうをを方合ぐ
　　甚かてうと意〜文字の拙きかんるものいや
一　しき人見人の不運ふよろう
　　記中郷と志ろ世人筆おみち意ろ　我ふ
　　あらぐ張人士朗ろ記を
一　張ふ切りかあろのうしくまぐく士朗ろ
　　あらぐ乃意ろ忠を士朗ろんにうう意両吟
　　の一巻主あの位と齟齬せるわて知べし

折東海道の紀行あげてかぞへ尽くしがたしとうきたはけ蘇
しきたはけうち伊勢にけうの人々のあこがれうつくし武蔵
ゆかりもうつ出うえんとぶひうるぬ伊勢の人ふうりうの三つう
たまえんとくつをくりコトラふかわくというまもひとなま
ろかなてと屋敷の菜湯甚信実のえ和佛上人くうの月
の縁〜天同〜俗世こそよりあまてと言ふ和紀えのと
如月廿日あまり三あこてあて〜その三人東うえ行ようう
馬ゆものらぶまづ歩よりぞ向く

いろいろ岩ろ山ろる花見こうれ　士明

越田の郷とうぶとうそ三ふりうるうまくうるまぶ花の
里行宝の里か三の市も八ちうの寺も花の見そ
ふうてとそもひろゆひうゆ〜

長川ろる浜ほどゆも
みの毛の郷ゆかうや東の風
と大雲に吟ぎる人あり知どうえうかつまぶ問侍
の卓池と武門ひうらふ〜きたあづまの強毒とも
ゆせんとそ法とあうくかけつける桜ひうるぶ〜
ようゆ人知〜
長百廿同の揚あう武ゆ源氏ふまのう出長ふのく
揚と流ろ滝川ろうと伊ふ人くふ三の三條とけ
独んとちゆまつ〜せ〜よ　あまいそや武天ほの家と
流ろとろまでゆくとかそ和歌の里の弟とろまぶ
伊良虞寺もうらもあるまの〜いろの世ゆや
道連の法師と匂ふ郷もうて天然とまらくと

浮る世の中山こそこえねゆくもかへるも旅念ら
まことそのつくさへ命なりをそとよめる事あはれに
きくのことをひつけてそくおもひ続けみ
よきれどに花のかげある霞かな　士朗
筏井同じの茶人かまへかる色見
きこれ時にもありなり大桂川　松兄
ありともあせてく笑し似て面白かりけり
遠出く花も葉を出よき川の山　士朗
うつの山紙えしやさ花になりまして手かさにの葉の色に
出すとて
竹庵集ふもなり
あつてうちもたもあともさびるるとくしん如くかし
うれかりと見ても花の旅衣かな　松兄

そよ暮てまくらに志らり鶏のこゑ　士朗
東路の末は古里と思はせく佐夜中山あはれに
宗長の墓所ら見てやまる事紀
金谷にて二にふまるゝ庵りそとら
今日もりんくろり二の山　卓池
うとの浜許奴夢のうら清みう紀の西へとさとら　士朗
三保の松朝暉夕陰気象千萬なり
定輪寺　宗祇を葬し所自画自賛を掛すと
うつしかへくて花かげあつら世のうけを
志らぬが花とうらやまれぬる
世に降るも又々宗祇の宿り哉
かゝる記念をいとふみし昨の宗長も是をあはれと

よみうまと今日の我中もいづまうの洲角にはやどりうまとぐる
と例の金佛二人の屋敷をたづねて出ぬ

たちてゐる山　士朗
雲のたのうりたくく宮者ル
第ちうの日のあとあとうん歩り　松兄
雲の日の水ちうも宮らぬ見えうる
大阪よりて
年ぶうつかーかうーー蔵三坊他り出くちー
空蔵ままちの時ーーーーー
桜の寄の部ちんくとうりて桜のあとに他う桜のひまに
咲ちーたちぶ咲毎の野ぶ高とちんれ宮者家ちて宮ー

うくくちちの第人ら
時守と見とうちあれ老宗ちり
かくひわり中にちまくく春ちたりぬ
腰敷やあちく止ぬる貝れ口　士朗
とちかりちひつけ待る

雀園

廣ちゆて人くあり天狗に奇ちれハこぶちぶく
軍兵甲乙人等乱妨停止之事
とちる世る等乱のうん宮ちりちねん地ち公
嘘ちり月ちとりちーと云本法狗ちにあちちくく
弟ぶけ風につけ腰ちの見ち結ちぶちぶ入ちー
神ちち川

申酉にあつて五三の時こそ馬方はく男蔵長つ子
乃の名とりに立交り爺と呼とかきさるの人も懼
さとふるまふのこゝろさるや
時代のさゝの川よまつ引ー岩ひくるる人俣たくこう
あー十の宮にふこて夕日鏡花ふいる
百里まつく岩に岩ぬ岩ぬ花ぬ
知るまつわしとくん　松兄
水川や海ふたうくふさくら　卓池
士朗

綾り方をとまとひく集よのかてふ二よ参ふもと
云那を誰もあるべりれとかさたふひるさかくりて無
ふる紀ふ花やとらむ集ふてあめるめ一ふ見ともを

いまてく人に高ふるまりとかりひるいとふ生
とうあつねさ月に出ふるねうぐようとそみち生八の
年あまに出ふもるめくさそいどおのづうらうそ
たう鏡ありて初そに出ふりとおりふひとつ八あり
ぬぐーもてーゆく岩生かくまのひとさに出ふふさうの
ふる人ふりて物をさうふあふまうう竜されば
ふる紀ゆも初ふ紀中も花ぶできめとや

大必山人甚成美

集名のつ氏ふ八不二紀りふ物ふ字
鶴生ふといふ多ふこ八富生ぬ出に
ありき飛よく蓬ふ似ふ行をそ

そもそものと詠まるを秋海棠と申すてらく

ふりまたまて

松兄
たくち

ふる先生

尿振先生晨に洗如をとりて法生を机下に呈せしめ
色に海さく曰詞八繍くに成くつくに荒に数の只ひわる
に新らく知わらさるに古しまに知ねとに八孤に不の聚
沫無事のにに百と繍り宝あ集とにつけるる数数
して思ひうけ一にうに成郷の扇あにせにち
沿へにるも思ひうけ知知わうれおうけきに八うり幕と
せにに似てもに世にもちたきと
飄こもとあふれに常るに八思るに吉田乃

法師が相にに知意にもれ
ふまりにまあふにと思へしもにに見にる
知にひわうに知わりて孤に八新の中に丹法死篇に死
てにに為に木のにれあひまれるに怪奇に法に
かにに事のに多に八殺風事出に法に古人にるの
ありにるに事くにに法にに見にまにきの二言の
て間の所にに又にりかの方式紀に少の八樋のにとみ
の小路とかやにど学にに法にくだ
あるがにに繍んにて長蛇の州男に入にく懐素に州
字のごにくいにもつぐべにに黒海の松示を法にく
所の名八にに松の名八青く硯の浪八白くにあるべきを
香のにとくにちかへて抑ふにへいてや凡

夫の悪業八黒色ニシテ聖人の赤色と合して紫に
なんゆるごとくなる二人の艶色を以上の三人の弱者の
ことをあつて家の雪のやうなる色を出すことを見
くひわることくく漆けさるいまこれをて面子寺一代
密法を人ことのことをもつて知せたんい毒月の材に為
為と捨くの古そ〳〵ふるく野狐の随て五百生を
ふることも法の人世をあそぶ〳〵ふ法を為くに仏界を悟とぶ
明樹のあることをもて如と上たのまぶ言く百人学ぶ学ぶ
自国自在をるべし今や鬼神とをるを尾張の人よ
對をる亦赤鬚胡の面くさのことを毒ことを所をくかり
ゆもひわるる死古ををりのそ亦くることを只るるるるるる
右この尿撮先生故膳文記行のるにあづかるべと

いへども尾張人に對をるの間をものして載く
古にあるる第五の推参をるのこ

一 珍客 江戸自見物のこと
一 桑田隠居 名月こと
一 序上書畫信止 こと
一 人品 今不論 美勝 こと
三月八日

金令舎 執る

墨ころ〳〵と書くに承恭をるをつけるにをのん
今をもつ〳〵ものをうちをけてやをつ〳〵

墨田川舟せうよう

ちるを惜てはつ月見ける哉　壬也　青川

仕人とのの日のうらをあらはせばみありてうれしきそる

いとやうにたつとひまある風あり三の舞にるひされて

雪り合ふまつ人待もあるまるるうぬそ尾れ枝の

ほうふくさまもう今やうかるてくさもらたそ

成英亭

年くれぬ世のうれやうれかうれ年り　士朗

空死ふらふをとるめをる紀　成英

郷ふ年れ初逢ふき春風う　みち春

酸もの紀ふのくよ紀ふ春　明

五いさふと月の小舟を引ふ　英

本城かふ人紀ふ春ふ附あを

雪ふふて出射山　素とくるるく

宗祇とふ　ゆメ

惜まれふままてくまる眼ふ姫

終不今とも慶斗ふ

嘉を出る名鈔の茶風ふるゆて　春

ほの紀ふふう春後の　酒　朗

一まふふ　ふわてぎまて三月　英

乞合ふふふ月れ果もる紀　春

許やふふ茶に似る袴ふく　朗

春まの夜の法けるかまふ　英

仏とい人池とも春ふ梅れちる　朗

[illegible]年ころの時きそら
のうかりと夢をうえる蛍の雲　青
笠わひ[illegible]をうたる蛍　方　朗
吉田も吉[illegible]も[illegible]ん　吳
一人撫[illegible]ん　青
無寺[illegible]の[illegible]を[illegible]集　朗
[illegible]ひの[illegible]華義　吳
月ゆ[illegible]ゆ河豚ハ食ふ　青
新[illegible]を待らん　朗
日[illegible]の問[illegible]かく　吳
数とり[illegible]月をうら[illegible]　青
[illegible]月[illegible]かく義の人　朗
吳

[illegible]のり[illegible]冷しまず　秋　青
わ[illegible]新炊[illegible]の面　朗
[illegible]二人[illegible]べき　吳
幣[illegible]狩[illegible]とりとぐ　青
小[illegible]の絶[illegible]とく　青
[illegible]風[illegible]角田川　青
[illegible]ん　青

各泳十二句

[illegible]の[illegible]を[illegible]ひ[illegible]ば
又[illegible]と云別世界[illegible]
[illegible]厚[illegible]ん[illegible]

あるじは書く出るる句

雨うしかりしかりをを出れば
眼とまりなかりかりゆる
とこもかも雲有嘯る田とはて
をとこ　はひまに炭に土ちり
数だが名ろ月又さるあらん
子供をおきさ高にそよく
高近の今年初のの深夏よ
糸めの川のふるのせりし武
黄金の鯛は集る日くまるる
ちりことの降る嵐おさ一る
おろろ戦争ふくとはらまく

みち表
士朗
表
朗
表
朗
表
朗
表
朗
表
朗
表
朗

紙の袋　森の中に　拾ふる　拾子
正月　雨のそそぐも月を出るる
ちり〳〵　ちをを　法人　池水
まくさ死　拾のそ　ふる山の奥
降るの　まこの　あるひろう
等移を　法ふ　ふり孤に
ひろ　ろそ　ちやまれ
奥風り　紙の　夏のあるふん
死の　ろ死　まくかまど　掃　出を
尼ぶ　たた　て　森　百八　月夜
寄も　実の　入　秋　よ　ゆく
降く　まま　降　ぬ　ゆく

表
朗
表
朗
表
朗
表
朗
表
朗
表
朗

蕉雨
蕉朗
蕉雨
蕉朗
蕉雨
蕉朗
蕉雨
蕉朗
蕉雨
蕉朗

三月ひとたち侍る　書　ぬる　蕉

巣兆不時の酒を送る大キサ鼠の牙れ如し一薫
一ふを出る月源のあるさ酒一ふる　あ後湾渓
ふのもとく五葉け拾年ふをちぶ〜かけ〜ふ侍る
焼酒ふや味ふ〜ふ仙侍ふ〜べ〜
そ外かさぶけふ〜ふ侍ふるのまふより　ちれば
ちさび金令連の遊ひそ源門奥の家の侍ふ大
孝の別業も酒軍ふりふ〜ふ下ヲの美侍ふ
ぬをまれ草
ある日もく〜ふそ〜なふ天孝風を袋ふゆ〜免
ふ〜ふ〜ふ〜ふ侍ふをふ〜ふ　十七日　三月